

# 資料渉猟余話

その139

夏目漱石の東京帝  
国大学（現東大）講  
師時代の教え子が、  
飯田中学（現飯田高  
校）に赴任している  
ことを知った。金子  
健二という人物で、  
飯田高校の名簿で確  
認したところ、確か  
に明治38年10月か  
ら40年5月まで、英語  
を担当していること  
がわかった。

## 飯田にきた漱石の教え子

金子健二『人間漱石』

竹村雄次

そこで、図書館ネ  
ットワークで検索し  
たところ、上郷図書  
館に、金子健二著  
『人間漱石』という  
本があることがわか  
り、借りて読んでみ

た。金子が帝大で受  
けた漱石の講義内容  
などが克明に記録さ  
れていて、コアな漱  
石ファンにはたまら  
ない一冊であろうと  
思った。しかし、残  
念ながら飯田中学に  
ついての記述はなか  
らなかった。

ところが、この本  
について調べていく  
と、上郷図書館の物  
は初版本（一九四八  
年刊）で、八年後に  
同じ書名の増補改定  
版（一九五六年刊）  
があることを知った。  
飯田にどうも貴重  
な記述であると思  
うので、紹介をし  
たい。

飯田中学赴任につ  
いて書かれているの  
は、「私への忠告」と  
を断念して、それを  
精読し、其間外国ゆ  
きの旅費でも作って  
将来大きく成長する  
ことを考えるんだ  
よ。（中略）君は私の  
言葉通りやってみ  
なだね」

この言葉で、金子  
は飯田中学への赴任  
を決意した。金子の  
人生を決めた一言と  
いうことになる。  
次に、赴任した飯  
田が、漱石の言葉通  
りの「ひどい山奥」  
であったかが書かれ  
ている。



金子健二『人間漱石』口絵  
写真（上郷図書館蔵初版本  
より）前列中央夏目漱石  
二段目金子健二

積入りの英文学をう  
んと持って行って、  
東京に出てくること  
を断念して、それを  
精読し、其間外国ゆ  
きの旅費でも作って  
将来大きく成長する  
ことを考えるんだ  
よ。（中略）君は私の  
言葉通りやってみ  
なだね」

馬車で赤穂までゆき  
一泊、次は赤穂から  
馬車で飯田行、大き  
な峠を二つ三つも  
通過し、天龍川の流  
れを左に見、赤石山  
や乗鞍岳を左右に眺  
めながら、富士見駅  
から二十里行程を馬  
車のラッパに景気づ  
けられて、進むので  
ある。何んとおそろ  
しい都落ちだと思っ  
た」

この文は、師であ  
る漱石の『坊ちゃん』  
で、主人公坊ちゃん  
が、開校直後の飯田  
中学に赴任した青年  
教師の思いと、教師  
としての漱石の姿が  
伝わってくる。飯田  
下伊那にとっても、  
大事な一編である。  
この改訂版『人間漱  
石』。中央図書館の国  
会図書館デジタルコ  
レクションで見ると  
とはできるが、実物  
の本として飯田下伊  
那にあつてほしい一  
冊である。